

冠省 この度、貴誌は××氏論文「××」において、拙文が契機となつた新潮45廃刊問題を扱つてをられます。

私は、この問題につき、Hanada十二月号、一月号と二か月に渡り、拙文への批判に対する再批判を展開してゐます。これらの中で、具体的な名前を挙げて再反論した方は紙幅や論旨の重複、その他物理的制約上限られてゐますが、論旨の上ではすべての私への批判の主要部分には反論し得てゐると思つてゐます。

筆者諸氏にぜひ拙文をお渡しいただき、意味のある論争の継続、展開を呼びかけたいと存じます。

私は、常々、平成後期に入つての論壇、文壇の閉鎖性を異常だと感じてゐます。

雑誌はプラットフォームであり、様々な論を掲載し、また、雑誌の垣根を越えて、批判や対話の応酬があり、それを対談の企画で更に昇華し……といふ言論の循環を作るべきだと、若い頃より当然のやうに考へてきた私には、現状は、左派、右派、論壇、文壇、新聞といふフレームの相違を超えて、党派的たこつぽ化甚だしいと見えます。

昭和文・論壇までの歴史をポストモダンで完全にぶち壊した上、その初期にはまだ些かあつた知的緊張もその後解体の一途を辿り、続々と現れる能力の低い著者らに書かせ続ける為に、たこつぽで庇護してやらねばならなくなる……いふまでもなくかうした文・論壇の質の低下には、平成に入つての編集者諸氏のサラリーマン化も大きく預かつてゐることです。

私は変へたい。

党派的な結束、レッテル貼り、文・論壇の歴史的継承のない無教養な言葉の横行を止め、知と礼節と真の毒を存分に含んだ言論空間を取り戻すべく、文・論壇の閉塞的な現状を、私は変へたい。

いや、私が変へたいのではなく、日本の先人たちが全身全霊で怒りながら、あなたがたに、もつと真面目に仕事をせよと迫つてゐるのです。和辻哲郎の後裔も、小林秀雄の後裔も、ろくな人間がをらず、党派根性の根城に屯してゐますが、彼らの墓所は東慶寺内至近に、今も鎮まりつつ、怒りの波動を遙かに私の身心に伝へ続けてゐます。いい加減、目を覚ましなさい、全文・論壇の後輩たちよ、と。

右だ、左だ、産経だ、読売だ、朝日だ、文壇だ、論壇だ、その他一切の党派根性は一度皆で捨てなさい、と。言葉と言葉によつて、もつと現実にも理想にも、そして過去の知的蓄積の重さにも真摯に向き合ひなさい、と。

私の呼びかけにではなく、先人のその聲に耳を傾けられんことを希望し、筆を擱きます。

不一

平成三十年十二月五日

小川榮太郎

追伸 なほ本状は、甚だ無力ながら透明な言論空間形成に向けた一つの呼びかけとして、内容と送付先一覧をネット上で公表致します。